

Licking Dog

～あなただけの舐め犬～

— prologue —



■Licking Dog ～あなただけの舐め犬～

-prologue-

待ち合わせに指定されたのは、ある駅から少し離れた場所にあるカフェだった。

「いらっしやいませ」

無表情のウェイターに、バックにかかるのはトーン控えめのクールジャズ。雰囲気から、ゆっくりと静かに会話ができる所である事がわかる。どちらかというとカフェというよりは、レトロな佇まいを持つ喫茶店といった趣だ。

店内を見回すと、テーブルに広げた資料を前に、神妙な面持ちの営業マンらしき二人連れ。あとは、読書中の一人客がひとり、ふたり。

客がいるにしても少数且つ疎らである事は、こちらにとって好都合だ。会話を聞かれない程度に距離

を開けて、席を選ぶ事もできる。

まるで人気のない場所であったなら、私は今以上に不安を感じていたはずだ。かといって人目の多い場所は避けたい、というのも正直なところでもある。

それをわかっていて、適度に人がいながらも距離感を保ちつつ秘密の会話ができるこの店を指定してきたのだろう。

どこへ座ろうか思案していると、私と入れ替わりに一人客が店を出るようだ。その隣、一番奥の席が空いており、周りにほかの客はいない。あそこなら、手前の観葉植物が店内からの視線を適度に遮ってくれるだろう。

店員に待ち合わせである事、奥の席に座る事を告げて紅いカーペットの上を進んだ。

私はこれから、ある男に会う。

本当の名前も知らない、ほんの数通のメールをや

り取りただけの男に。

……女だつて性欲はある。

恋人がいればセックスはできるだけしたいと思う。でも、恋人や特定のパートナーがいらない今、したい、と思つても相手がいらない……となると当然ながら一人で慰める、という事になる。

女性には、様々なシチュエーションを思い描いて、という想像派が統計では多いらしい。

私もそのうちの一人だ。

しかし、パートナーのいない生活が長く続くと、ネタの自己供給にも飽きがくる。そうなるとネットですネタを探す事になるのは必然だ。

動画、漫画、読み物。

今の時代、願えばどんなものでも、自分の好みに合わせて、いわゆるおかずとなるものをネット上に見つける事ができる。

そんな中で、私は気づいてしまった。

自分にとって、一番興奮を掻き立てられるもの。

それが、大きく広げた足の間に男の顔が埋められ、口や舌を使って女性自身を熱心に愛撫しているシーンだという事に。

そう、私は、舐められる事が好きなのだ。

自覚すると、そんなシーンばかりを探しては、それに自分を置き換えて想像した。

そして、知った。

『舐め犬』という特殊な性癖の存在を。

「ご注文はお決まりですか？」

「……ブレンドで」

「かしこまりました、少々お待ちくださいませ」

注文を終えるとさらに緊張が増してきた。

約束の時間までは、十分ほどある。

早く来すぎたのだろうか。少し遅れるくらいの方が、よかったのかもしれない。がつついてる、なんて思

われたらどうしよう……。

そんな事を考えながら、腕時計とテーブルの木目に何度も視線を往復させる。

『舐め犬』とは、女性を舐めて奉仕する事に悦びに感じる男性の事を指す。

彼らは皆、舐める事が大好きで、それを目的に相手を探すのだという。恋人でもセフレでもない、『舐め犬』である自身にとつての、舐めさせてくれる『飼い主』を。

そんな『舐め犬』との行為や、彼らの『飼い主』との体験談を読んでは、妄想をした。

思う存分、ゆつくりと、舐められたら。

柔らかく、ねっとり、ねぶられたら。

性急に高められるだけではなく、快楽の波間にたゆたうように、時間をかけてそこを可愛がられたら……そんな想像をするだけで、体が熱くなってい

くを感じた。

しかし実際に、こんなふうに『舐め犬』に会うなんて事を初めから考えていたわけではない。体験談などを読み、想像するだけでも、十分に楽しめていたからだ。

それに、セックスの相手がいないからって、所謂出会い系のようなものに手を出すのも気が引けた。でも。

読めば読むほど、『舐め犬』という存在が気になり、もっと知りたくなり……リンクに誘われるまま、私は『舐め犬』のSNSサイトにたどり着いていた。

「貴方が嫌がる事は絶対にしない」

「挿入はしない」

そこには、そんな投稿がいくつもあった。不思議だ。

初めは「知らない人なんて」と思っていたのが、「舐めるだけ」と書かれていると、それならば、という考えがちらつき始める。

セックスへのハードルは、高い。

でも、舐められるだけならまだ……と。

体験談や投稿を見ているうちに、感覚が麻痺していったのか、それとも魔法にかかったのか。

結局、好奇心の方が勝ってしまい、気になる何人かを投稿からピックアップし、彼らと何度かメールのやり取りをし始めた。

今日ここで会う約束をしているのは、そのうちの一人だ。交わしたメールの文面では誠実そうに感じられたが、一体どんな男なのだろうか。

「会ってみて生理的に無理だったら、そのまま何も言わず帰ればいい」と彼はメールに書いてきた。

結局は、それで決心がついたようにも思う。

一見で「無し」と感じたら、黙って席を立てばい

いのだ。

そんな、彼とのメールのやり取りを反芻しつつ、木のテーブルの丸い年輪をぼんやりと目で追っていると、すぐそばにふっと影が差した。

「……こんにちは？」

「……！」

「えーと、メールをいただいた……」

「あ、はい、あなたが……？」

「はい、僕です」

意外だった。

そこには、至って普通の、サラリーマン風情のスーツ姿の男がいた。

「すみません、お待たせしてしまいましたか」

「いえ、私が早く来ちゃったので……」

彼はにこやかに笑うと、失礼します、と私の前に腰かけた。ビジネスバッグを隣の席に置き、メニュー

を取り上げて広げる。

私は顔を上げる事ができず、黙ってその手元だけを見ていた。

「お決まりでしたら、お伺いいたします」

「カフェオレお願いします」

「かしこまりました、少々お待ちくださいませ」

落ち着きのある低目の声でウェイターにオーダーを告げると、おしぼりで手をふき、水に口を付ける。

私は俯きながらも、目線で彼の動作を追い、合間にちらりと彼の顔を伺い見た。

彼がどんな風貌であるのか何度も想像したし、メールのやり取りの中でどのような外見なのかを、不躰ながらも聞いた事があつた。「別に普通ですよ」の答えに、普通って何をもって評価するのか、などと邪推もした。そう言っておけば、実際に会ったところで「普通とは人それぞれ」と体よく言い訳もできると言うものだ。

しかし。

これはいい方向への期待外れと言える。

「そんなに、緊張してます？」

「はあ、まあ……」

「視線、合わせてくれないんですか？」

くすりと笑う声が聞こえて、私はそろそろと顔を上げた。

「やっとこっち見てくれた。改めて、初めまして」

「はじめ、まして……」

にこりと私に笑いかける。

人懐こいような、柔らかな笑顔だった。

「変な人が来たらどうしようかと思ってた」

「メールに書いたとおり、普通だったでしょ？」

「普通っていうか……」

再び目が合うと、また微笑む。

人好きするタイプなのだろう。和やかな雰囲気を作ろうとしている事がこちらにも伝わってくる。

それにしても、彼くらいの見目なら、普通に彼女のいそうな、いやむしろ……。

「あなたくらいの人なら、あんな掲示板に書かずとも女性がほつとかないんじゃない？」

「そんな事は、ないですよ。それに、僕は自分の性癖を自覚してあそこに書きこんでいるんです」

ただ舐めたい、という性癖の人がいるのは、まあ理解できた。

しかし、舐めるだけと言っておきながらもセックス目的の輩が混じっているのは当然で、それはメールだけでは推し量れない。舐め犬専門のSNSでも、飼い主志願の女性に対し注意書きがされているくらいだ。掲示板やメールでそんなふうに約束されたところで、すぐに信用できるだろうか。「舐めるだけ」なんて事が本当に可能なんだろうか、疑問が湧かないわけではない。

彼とて同じ事だ。

「本当に、舐めるだけ、なの？」

「そうです。もし、セフレが欲しいって事なら、僕はお役に立てません」

「……もしかして不能ってやつだった？」

「あつはは、ひどいなあ。違いますよ」

「だったら、どうして？」

「僕はただ、女性が気持ちよくなってる姿を見るのが好きなんです。自分が気持ちよくなるより、舐める事で女性に気持ちよくなってるほしいだけ」

簡単に言えば……と彼が続けたところでウェイターがこちらに近づいてくるのが見えた。私はとっさに自分の唇の前に人差し指を立て、私達がしている到底人には聞かせられない会話をやるように合図する。と、彼も合図を理解し、同じように唇の前に人差し指を立てて口を噤んだ。

「お待たせしました。ブレンドと、カフェオレでございます」

同じポーズで「しーっ」としあった事が、二人で共通の秘密を分け合ったようで、何だかくすぐったい。二人してウエイターが給仕しているのを無言で見つめていたが、私が思わずふっと息を逃すように笑うと、彼もはにかむ様に微笑んだ。

「ごゆっくりどうぞ」

ウエイターが去り、足音が聞こえなくなったところで、彼が再び口を開いた。

「簡単に言えば、挿入よりクンニする方が好きなんです」

その後でぼそりと「あー、聞かれなくてよかった」と呟く。少しだけ肩をすくめて表情を崩した彼に、私の中にあった凝り固まったものが少しずつ、じわじわと解け始めていくのがわかった。少なくとも、彼に対して嫌悪といったイメージがないのは確かだ。メールのやり取りをしていた時も感じた事だが、会話のテンポや間が心地良い。内容は下世話なもの

でしかないけれど、彼に対しては自然とさりと話せてしまうのには、自分でも少し驚きではある。

ブレンドに少しだけ砂糖を入れ、かき回す。

熱いコーヒーをふーふーと冷ましつづいただいていると、彼は声のトーンを少し落とし、静かに話し始めた。

まず、私が席を立たずにいる事が、第一関門を突破できたという事でうれしい、と。

メールに書いたように、今日は会うだけのつもりで自分も来ているという事。

そして、彼自身が舐め犬として相手に約束している三つの事柄についても。

一つ目は、相手を傷つけたり、不快にさせるような行為は厳禁、という事。

二つ目は、望むだけいっぱい感じさせて、いかせ、という事。

三つ目は、唇へのキスとセックスはしない、という事。

「他の人も書いていたけれど、唇へのキスはしない、というのは舐め犬にとって決まり事なの？」

「NG行為については、女性が決めるべきだと思いますよ。ただ、唇へのキスはしない、と書いておくと、頂くメールの数が変わってくる事は事実ですね」

「キスなし、の方が、反応がいいという事？」

「そういう事です。セックス以上に、唇同士のキスは特別なもの……特に、女性はそう感じている方も多いとか。だからか、唇へのキスをNGとする方が多いんです。言葉を交わし合う事や、体を重ねる事以上に、気持ちが入ってしまうのかもしれないね」

キスをする、情が移る。

映画にも、そんなフレーズがあつた気がする。

恋愛感情がなくてもセックスはできるのかもしれない

ないが、唇同士のキスはセックス以上に愛や恋、そういう思いを抱く相手としたい。唇同士のキスは心に寄り添う特別なもの、という考えには賛同できる。

「僕は、舐める事で気持ちよくなって頂きたいだけです。純粹に気持ちよさだけ感じて欲しいから、気持ちや情の籠ってしまふ唇へのキスはしません」

彼はきつぱりとそう言い切った。

「僕たちのような舐め犬の事は、気持ちよくなるための道具だと思ってくれていいんです」

「道具……」

「そう、道具。パイプや、デイルドと一緒に」

道具と考えればいい、という彼の言葉に、一種の清々しささえ感じる。

ただ、舐めさせるだけの道具。

ホテル代もいらない、身一つで、いつでも気持ちよくなりたいときに呼び出せばいい。

余計な感情を持たず、ただ舐められて気持ちよく

なるためだけの道具として利用する。

たったそれだけの事、だ。

「僕のような舐め犬は、あなたのような女性に、舐めてご奉仕する事が、至上の喜びなんです。唇以外ならどこでも、舐めて、キスして、気持ちよくなつて欲しいだけ」

……だから、僕の飼い主になつて。

私を見つめる彼の眼は、そう言いたげであつた。

「一つ聞いてもいいですか」

「何でしょう？」

「候補は他にもいたと思うんですよ……あそこの掲示板、結構舐め犬さんの書きこみが多い方です。実際、ほかの人にもメールを送られたのでは？」

「……まあ、そうね。何人かに」

「他の方にも、お会いになりました？」

「いえ、あなただけ」

「僕には会ってみてもいい、つて思ってくれたのは、

どうしてですか？」

彼の言うとおり、気になった何人かにメールを送った。それは年齢的な事や、行動範囲、時間的なマツチングなどを考慮しての事。

彼を含めた数人と何往復かのメールやり取りを経て、彼ただ一人に会ってみようと思うに至るには、一つ理由があつた。

「……指が」

「指？」

「添付してくれた写真に、あなたの手と指がはっきり写っていて、綺麗だな、つて思ったの。だから」

会ってみませんか、と誘われた時に彼が送ってきたのは、わざとであろうがピントのずれた写真だった。首下からウエストあたりまでの全体的にぼやけたもので、鏡越しの自撮りのためなのか、手元だけがはっきりと映っている。

その手元が何より印象的だったのだ。

すらりと長い、けれど男性らしさを感じさせる指に、綺麗に切りそろえられて清潔感のある爪。

それが、他の誰でなく彼になら会ってみてもいい、と思った最たる所以だった。

全く知らない人に会って、話をする。メールのやり取りをしているとはいえ、どんな人物か具体的に知っているわけではない。しかも、知り合うきっかけは性的なことで、もしかしたらこの先、自分の体を預ける可能性がある相手なのかもしれない。

となれば、清潔感のある人、というのは最低限の条件の一つでもあろう。

清潔感を気にする男性か否か。

それが顕著に表れるのは、指先、特に爪の処理だ。

「指フエチなんですか？」

「言われてみればそうかも。でも、女の人って割と男の人の指って見てると思う」

「へえ……この指が、自分の中でどんな動きをする

んだろう……なんて想像をするんですか？」

「そんなわけじゃ……！」

顔を覗き込まれて、慌てて否定した。

「ほんとうに？」

テーブルの上に乗せていた手に彼の手が伸びてきて、私は反射的に手を引っ込めた。

「あっ」

指に引っかかったミルクピッチャーがカシャンと倒れ、私の指とテーブルを濡らす。慌てて逆の手でおしぼりを取ろうとしたが、それよりも前に、濡れた方の手首を彼に掴まれていた。

彼は私の濡れた手を自分の口元まで引き寄せる。

そして、徐にミルクでできた白い筋に、舌を伸ばしてきた。

柔らかく、ぬめついた感触。

肌の上の白い液体を、彼の紅い舌に舐めとられていく。温かな舌……触れた所から、彼の体温が皮膚

を通して伝わってくる。

私が呆然としていると、今度は手首の方から手の甲へと一つと移動し、指と指の間に舌が伸びてきた。ちろちろと、指の間という皮膚も薄く敏感な部分に触れられて、体がビクツと揺れる。

そんな私の反応を感じたのだろうか。

彼はため息のような吐息をつくとき、今度は掌側から指の方、中指へと舌を這わせてきた。

「……！」

それは不思議な光景だった。

舌が二つ……？

私の指が、二つの舌に挟まれている。

指を挟みこんで、二つの舌先が交互に上下しながら、するすると、指先へ向かっていく。

二つの舌は指の両側で縦になったり、横になったり、また、締め付けても来る。それぞれが、それぞれに、小刻みに別の動きをしながら、私の指を舐め

ている。

そこまで来てようやく解った。

彼の舌先が、二つに分かれているという事に。

ねつとりと絡みつくような舌の動きから、目が離せない。二つに分かれた舌先が、踊るように翻っては私をくすぐる。まるで、二人の人間に両側から舐められているように別々の動きをしたかと思うとき、今度は左右がシンメトリーな動きをして、やはり一つの舌なのだと理解する。

じりじりと二つの舌が指先まで舐めあげると、彼はそのままちゅぷりと、私の中指をまるまる根元まで飲みこんだ。

何かを言い出そうとしても声が出ない。

というより、体に力が入らない。

目を細めてこちらを見る彼と、視線がぶつかった。

口の中で、私の指を二つの舌でなぞりながら、彼は私を見つめてくる。

うっとり、おいしそうに。

ぞくりと、体の深く奥の方で、何かが震える。

指先が、熱い。

彼の中に取り込まれた指が、熱い。

粘膜に覆われて、吸われて、なぞられて、くすぐられて。そして窄められた唇から私の指を出しきる寸前、指の先端を細やかにちろちろと舐められた。

それは、明らかにその行為を私に想起させるための動きだった。

小さな突起を、やさしく愛撫するための、動き。

濡れた唇と、二つの舌先の、艶めかしくも細かな振動に、私はじわっと何かが溢れだすのを感じずにはいられなかった。

「ほら、ちゃんと拭かないと……」

彼は放心状態の私をよそに、まだミルクの残っている私の手指を丁寧におしぼりで拭い、テーブルにこぼれたものも拭き取っていく。そしてウエイター

を呼ぶと、ミルクピッチャーを取り換えて欲しいと告げた。

「舌……」

「驚かせてすみません。僕、スプリットタンって言って、舌をちよつと改造しているんです」

「……痛く、ないの？」

「傷が塞がってしまえば痛くないですよ。ピアスと一緒にです」

そう言って彼は舌を出し、二つの舌先を器用に動かしてみせた。

「話していて、全然わからなかった……」

「普通にしていれば、気づかれる事はないですよ。気づかれるのは、やっぱり敏感なところを舐めてる時、かな」

くすりと笑って、またじつと私を見つめてくる。

「そう、例えば……」

“クリトリス”

「とか……」

声に出さず、唇だけでその単語を口にする。

見透かされたようで、顔が熱くなる。

「感触が違みたいですよ。挟まれたり、両側からくすぐられたり、つて」

そうなのだ。

私は想像していたのだ。

二つに分かれた彼の舌先の間に、クリトリスを挟まれて、扱かれて、くすぐられるのを。両側から二つの舌先で皮をそーっと剥かれて、舌先の間に、剥きだしのものをくるみこまれるのを。

熱くて、細やかに動く舌。

しかもそれが二つ。

柔らかくて、それでいて芯があつて、ねっとりとして肌を這うあの感触。

彼の二つに分かれた舌で、私の一番敏感な、あの一点を自在に弄ばれたら。

そこだけでなく、中でもあんな動きをされたら。

ぐちゅぐちゅと、中をかき混ぜられたら。

そう、この舌で舐められたら、さぞ気持ちいいだろう……と。

「失礼します。ブレンドはおかわりを一杯サービスしておりますが、いかがですか？」

「あ……じゃあ、いただきます」

慣れた手つきでカップにコーヒーを注ぐと、ウェイターはごゆつくり、と述べて下がっていった。

新しいものに取り換えられたミルクピッチャーに手を伸ばし、湯気の立つカップに注ぐ。スプーンでぐるぐるとかき回しながら、心の中で、落ち着け、落ち着け、と自分に言い聞かせるように繰り返す。

そうでもしなければ、想像がどんどん膨らんでいきそうだ。

いや、もう、どうしたって止められない気もする。それほどに、二つの舌の感触は鮮烈で……まだ指

先にねっとり絡んでいるような感覚が残っている。

「このまま、僕に舐められませんか？」

「えっ」

「だって、今すぐにでもして欲しいような顔、してる」

「う、うそっ」

くすくすとからかう様に彼は笑うが、目でわかる。

彼は、その気で私を誘っている。

今ここで私が首を縦に振れば……あの舌の感触を、私の一番触れて欲しいところで、存分に堪能する事ができる。

私は、彼に気づかれないようにゆっくりと唾を飲み飲み込んだ。

「なーんて……わかってます。今日はとりあえず、会っただけで約束でしたもんね。無理に誘うと嫌われそうなので、やめておきます」

そう。

とりあえず、一度、試しに、会ってみるだけ。

……そうメールに書いたのは私だ。

「今日は僕に会った事を一旦持ち帰って、じっくり考えてください」

舐め犬として受け入れて、飼い主となってくれるのか否か。返事も、無理にくださいとは言わない、受け入れられないなら、そのままフェード・アウトして構わない。

彼にそう言われて、ほっとした様な、がっかりした様な、複雑な気持ちを抱えながら、私は小さく頷いた。

それからは取り立てて色気のある話はせず、少しばかりの世間話をして、解散となった。

店を出て、細い路地を並んで歩く。

歩いていて、何度か互いの手の甲がかすめるよう

に触れた。彼は気づかないのか、それとも気づかない「ふり」をしたのか。

もし、このまま手を握られて、引き寄せられたら。

強く誘われ半ば押し切られて、なんて言い訳ができるのに……と少しだけ考えて、やめた。

きつと彼は、強引に私にせまってくる事はしない。

私が、舐め犬である彼を受け入れて、彼の飼い主となるのかどうか。

全ては、私自身が決める事なのだ。

「私は、こつち」

「僕はこの先でタクシー拾うので、逆ですね」

「じゃあここで……」

「今日、お会いできて嬉しかったです。ありがとうございます」

「ございました」

「こちらこそ、ありがとうございます。ご馳走になっちゃって……」

「当然ですよ、このくらい」

もう一度、ありがとうございます、とご馳走様、を告げると、彼は向き合っている私に一步近づいてきた。

「連絡、もし頂けるなら、嬉しいです」

彼のコロンだろうか。ふわりと甘く、少しだけスパイシーな香りがする。

「もし、あなたが望むなら……」

さらにぐつと接近し、顔が下りてくる。

「……今夜でも、いいんですよ」

唇が触れそうなほど近く、耳元で囁かれた。

耳朶を撫でる吐息と、低く響く濡れた声。

背筋をゾクゾクとしたものが駆け上がったいき、

私はぎゅつと目を瞑った。

一つ大きくため息をついて顔を上げると、彼も数メートル先にいた。

胸元あたりでこちらに小さくひらひらと手を振っ

た後、背を向け歩き出す。そして、タクシーを捕まえると、するりと乗り込んだ。

ゆっくり動き出すタクシーの窓越しに、彼が悪戯っぽく笑う。

あの、二つに分かれた舌を。ろりと出して。

私は、ただ立ち尽くしたままそれを見送るだけだった。

彼の残していった、感覚の痕跡。

それが、時間が経つにつれ鮮やかに、そして色濃くなっていくのを、私は後で知ることになる。

題 名 : Licking Dog ～あなただけの舐め犬～ -prologue-
著 者 : 蓮 れい
発 行 : Lotophagos

当作品の著作権はすべて作者に帰属します。
本作の複製、再配布、無断アップロードや、無断転載 流用は禁止します。
発覚した場合は然るべき処置をとらせていただきます。

以上の諸注意を十分にご理解、ご了承頂いた上でお楽しみください。

ご意見、ご感想などございましたらブログまでどうぞ。

【Lotophagos～ロトバゴス～】

⇒ <http://lotophagos.b.dlsite.net/>

【suicidemorning】

⇒ <http://suicidemorning666.blog.fc2.com/>

Copyright(c) 2015 Lotophagos/suicidemorning All rights reserved.

